

令和7年度 分担研究報告書

多職種連携の視点による在宅医療の薬剤師介入方法の検討研究

研究分担者 竹屋 泰 大阪大学・大学院医学系研究科・教授

研究要旨

本分担研究では、「多職種連携推進のための在宅患者訪問薬剤管理指導ガイド」を活用した薬剤師教育および介入研究の基盤整備を担当した。これまで本ガイドを用いた介入研究や教育方法の体系化は十分に実施されていなかったため、初年度は研究開始前の準備として、同ガイドを基にした薬剤師向け e-learning 学習プログラムを作成した。学習プログラムは合計 450 分の動画教材で構成し、学習内容は総論、高齢者総合機能評価、多職種連携、在宅における服薬支援、臨床応用、医師・薬剤師連携ガイドとし、各单元について理解度を確保するための確認問題を作成した。さらに、補足研究として、多職種連携の視点による在宅医療における薬剤師介入方法を検討するため、在宅医療を受療する地域在住高齢者を対象としたレジストリ研究において、在宅医療導入時の訪問看護師初回訪問において、薬剤管理や服薬負担に関するアンケートを実施した。

A. 研究目的

在宅医療を受ける高齢者では、多疾患併存、フレイル、認知機能低下、服薬管理能力の低下、介護力不足などにより、薬物療法上の課題が複雑化しやすい。また、在宅医療では医師、薬剤師、訪問看護師、ケアマネジャー、介護職など多職種が関与するため、薬剤師には、薬剤情報のみならず、患者の生活状況、身体機能、認知機能、介護環境、多職種から得られる情報を統合して介入する能力が求められる。

これまで「多職種連携推進のための在宅患者訪問薬剤管理指導ガイド」が作成されているが、本ガイドを用いた介入研究や、薬

剤師教育における体系的な学習方法の整備は十分に実施されていない。

そこで本分担研究では、同ガイドを基盤として、在宅医療に関わる薬剤師が多職種から得られる情報を統合し、薬物療法上の課題を評価・介入できるようにするための e-learning 学習プログラムを作成することを目的とした。さらに、多職種連携の視点から在宅医療における薬剤師介入方法を検討するため、在宅医療を受療する地域在住高齢者を対象としたレジストリ研究を立ち上げ、薬剤関連課題を把握するための調査体制を整備することを目的とした。

B. 研究方法

初年度は、研究開始前の準備として、「多職種連携推進のための在宅患者訪問薬剤管理指導ガイド」を基に、在宅医療に関わる薬剤師を対象とした e-learning 学習プログラムを作成した。

学習プログラムは、在宅医療における薬剤師の役割、多職種連携の意義、高齢者総合機能評価、在宅における服薬支援、臨床応用、医師・薬剤師連携を含む構成とした。薬剤師が多職種から得られる情報を活用し、患者の生活機能、認知機能、服薬管理能力、介護環境などを踏まえて薬物療法上の課題を把握できるよう、実践的な内容となるように検討した。

作成した動画教材は合計 450 分であり、内容は以下の通りとした。

項目	動画時間
総論	95 分
高齢者総合機能評価	110 分
多職種連携	35 分
在宅における服薬支援	75 分
臨床応用	75 分
医師・薬剤師連携ガイド	60 分
合計	450 分

また、各単元に確認問題を作成し、受講者が学習内容の理解度を確認できるようにした。

さらに補足的な研究として、多職種連携の視点による在宅医療での薬剤師介入方法を検討するため、在宅医療を受療する地域在住高齢者を対象としたレジストリ研究を立ち上げた。具体的には、在宅医療導入時に訪問看護師が初回訪問を行う際、薬剤に関するアンケートを実施する体制を整備した。

(倫理面への配慮)

国立長寿医療研究センター、倫理・利益相反委員会にて承認を得て実施予定。(報告書作成時は審議中)

C. 研究結果

初年度の分担研究として、「多職種連携推進のための在宅患者訪問薬剤管理指導ガイド」を基盤とした e-learning 学習プログラムを作成した。

学習プログラムは、合計 450 分の動画教材として完成した。内容は、総論 95 分、高齢者総合機能評価 110 分、多職種連携 35 分、在宅における服薬支援 75 分、臨床応用 75 分、医師・薬剤師連携ガイド 60 分で構成した。これにより、在宅医療における薬剤師の役割から、高齢者の包括的評価、多職種との情報共有、服薬支援の実践、臨床場面での応用、医師との連携方法までを体系的に学習できる内容となった。

また、各単元に確認問題を作成し、受講者が学習内容を確認しながら進められる形式とした。確認問題は、単なる知識確認にとどまらず、在宅医療の実践場面において、多職種から得られる情報をどのように薬剤師介入に活用するかを意識した内容とした。

さらに、補足研究として、当教室で行っていた在宅医療を受療する地域在住高齢者を対象としたレジストリ研究において、在宅医療導入時の訪問看護師初回訪問において、薬剤に関するアンケートを患者および、家族介助者に対して実施し、在宅医療導入時点における服薬状況、服薬管理上の困難、薬剤に関する患者・家族の困りごと

などを調査し、多職種連携による支援の必要性を把握した。

D. 考察

本分担研究では、初年度の主要な成果として「多職種連携推進のための在宅患者訪問薬剤師管理指導ガイド」を実践的な薬剤師教育に展開するための e-learning 学習プログラムを作成した。これまで同ガイドは、多職種連携を推進するための指針として位置づけられていたが、それを用いた介入研究や教育方法の体系化は十分に行われていなかった。本研究により、同ガイドを薬剤師が実践的に活用するための教育基盤を整備できたと考えられる。

在宅医療における薬剤師介入では、処方薬の確認や薬学的管理に加えて、患者の身体機能、認知機能、生活機能、介護環境、服薬管理能力などを総合的に評価することが重要である。特に高齢者では、多疾患併存やフレイル、認知機能低下により、薬物療法のリスクとベネフィットの判断が複雑になる。そのため、薬剤師が多職種から得られる情報を統合し、患者の生活に即した薬物療法の適正化を図る能力を高めることは、在宅医療の質向上に資すると考えられる。

今回作成した学習プログラムは、総論、高齢者総合機能評価、多職種連携、在宅における服薬支援、臨床応用、医師・薬剤師連携ガイドから構成されており、在宅医療で薬剤師が必要とする知識と実践的視点を体系的に含んでいる。また、各単元に確認問題を設けたことで、受講者が学習内容を確認しながら理解を深めることが可能となった。

さらに、補足研究のレジストリ研究は、在宅医療導入時点での薬剤関連課題を把握するために有用である。訪問看護師の初回訪問時に薬剤に関するアンケートを実施することで、薬剤師が直接関与する前の段階から、服薬管理上の問題や患者・家族の困りごとを把握できる可能性がある。これらの情報は、今後の薬剤師介入内容を検討するうえで重要な基礎資料となる。現在解析中であるが、介助者 119 名（平均 70.0±11 歳）より得られた解析結果では、重回帰分析の結果、患者 ADL 合計が負担スコアと有意に関連していた。

一方で、初年度は学習プログラムの作成および調査体制の整備が中心であり、学習プログラムの教育効果や、薬剤師介入による患者アウトカムへの影響については、今後の検証課題である。次年度以降は、受講前後の知識・意識の変化、確認問題の成績、実際の介入内容、多職種連携の変化、患者・家族への影響などを評価する必要がある。

E. 結論

初年度の分担研究として、「多職種連携推進のための在宅患者訪問薬剤師管理指導ガイド」を基盤とした薬剤師向け e-learning 学習プログラムを作成した。プログラムは合計 450 分の動画教材で構成され、総論、高齢者総合機能評価、多職種連携、在宅における服薬支援、臨床応用、医師・薬剤師連携ガイドを含む体系的な内容とした。また、各単元に確認問題を作成し、受講者が学習内容を確認できる構成とした。

さらに、多職種連携の視点から在宅医療における薬剤師介入方法を検討するため、

在宅医療を受療する地域在住高齢者を対象としたレジストリ研究において、訪問看護師の初回訪問時に薬剤に関するアンケートを実施した。

以上より、初年度は、次年度以降に実施する薬剤師介入研究に向けた教育基盤および研究実施体制を構築した。

F. 研究発表

1. 論文発表： なし
2. 学会発表： なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得： なし
2. 実用新案登録： なし
3. その他： なし